

# 延嶽墓碑私考

今村是龍

## 序言

私は先に身延の傳説を蒐集して刊行してみた。そして今。こゝに身延山中の主なる武家關係の墓について記そうとしてゐる。甚だ漠たるもので汗顔ではあるが、こうしたことが少しでも何等かの用になるならば有難い。永い歴史を有してゐる身延の山中には様々その研鑽さるべき事物を藏してゐる。それ等のものが研究されてやがては『身延學』ともいふべき組織体系を具へる様になる日を望んでやまない。

## 徳川氏關係の墓碑

家康の側室おまんの方の碑塔が祖廟域に在る。紀水兩家の祖であることは言をまたない。大野山の墓は死後建立されたものであるがこれは生前、三十九歳（慶長十九年）の時に建立したもの、（註一）碑銘は日乾上人の撰。碑の正面は全部風化されて、左側裏右側にかけて碑銘を存する。當時は蓮華院と稱してゐたが後に養珠院に改めた。祖山には大功ある夫人で、祖師堂前の（註二）洪鐘（註三）丈六釋迦堂、（註四）寶

藏等はその寄進による主たるもの。その傳記等は別頭統記(二五卷)に見らる。造塔の當時は賴宣は權中將賴房は權少將であつた。主として德川氏一門の本宗に對する信仰は養珠院を祖として生れたものが多い。

上の山丈六堂附近、圓光庵上に德川家光の側室順正院妙喜日圓夫人の墓がある。傳は統記(廿五卷)に載せら人名辭書德川綱重の條下にも見える。統記に「妙經全函不勞誦徹」とある程の信者、甲府宰相綱重の生母。綱重の子豐綱即ち順正院の孫は、將軍綱吉に養はれ六代の將軍職を繼いだ、家宣がそれである。將軍の祖母としての順正院は遺骨を身延に納められ百日間、生ける人として給侍供養せられて後葬られた。順正院の骨は始め淺草幸龍寺へ納め次に増上寺へ葬られ後に遺命の通り身延へ改葬されたもの、碑の台座四方に(註五)銘を存す。天和三癸亥季七月二十九日の卒。

家宣の弟は越智氏稻葉家を繼いで伊勢守正吉と稱し其母即ち綱重の側室の墓碑を建てた、祖廟域に在り示教院妙沾日珠の文字が刻されてゐる。祖廟域には尙ほ會津松平家保科正之の生母淨光院法紹日惠大姉の墓碑があり正之の(註六)建立にかゝる。淨光院は秀忠の側室、別頭統記廿五に畧傳が載せられてゐる。會津松平家は現在子爵である。

### 紀州德川家關係の墓碑

紀州賴宣の室は加藤清正の女瑞林院淨秀日芳夫人で本宗の信者たることをまたない。側室淨心院法勇日瑩大姉も信者、その生子賴純は伊豫西條の城主、上之山の淨心院の墓は賴純の子賴致の造塔、正徳二年九十才の高齡で没してゐる。紀州家瑩域には賴宣の女で松平左兵衛へ嫁した松壽院、紀州九代治貞の母善修院を始め芳林院觀樹院遠紹院等の碑を見る。身延山に碑はないが伏見王女で二代光貞へ降嫁した天真院、即ち安宮と稱したお方も大信者であつた。

紀州家より分れた伊豫西條松平家は賴純の墓碑が一基獨立して、源性院殿顓空日純大居士の銘が讀み得る、墓前には代々の藩主が献じた燈籠が整列してゐる。賴純は承應三年に従四位上左近衛權少將左京太夫に任ぜられ、寛文十年西條城三萬石に封ぜられ、後、代々左京太夫に任ぜらるゝ例となつた。現在の子爵である。賴純の他、賴純の室、清性院、子息靈妙院天理院の墓を見る。

### 水戸徳川家關係の墓碑

水戸賴房の室、久昌院心周日勾大姉、光圀及び讃州松平賴重の生母、別頭統記(廿五卷)に見ゆる。賴房は寛文元年七月久昌院は同年十一月に薨じその十三回忌に光圀は常陸に久昌寺を建立してゐる。久昌院は私諡を靖定と贈られた爲め又靖定山禪那寺ともいふ。祖廟域にある墓碑は背面の(註七)文字に依り讃州賴重の建立にかゝる事を知る。身延藏の心越禪師筆画光圀讚の涅槃圖は久昌院菩提の爲め久昌

寺へ納められたものを明治十一年鑑師代に薩師の(註八)周旋で身延へ納めたものである。

### 尾張徳川家關係の墓碑

上の山五重塔附近に尾張四代吉通の室、瑞祥院殿天山勝光日淨大姉の墓碑がある。九條關白輔實の姫、享保十六年に薨じた。

### 京極家關係の墓碑

祖廟域に丹後宮津城京極高廣の室、壽光院昌榮日慈大姉の墓碑が在る。備前池田輝政の女、二代將軍秀忠の養女となり高廣に嫁した。現在の高津本妙寺は秀忠菩提の爲めに壽光院が創したもの。高廣は高知の次子、高知は近江蒲生郡より出で信州伊那十萬石を領し、關ヶ原役後に宮津城に封ぜられ十二萬七千石を得、長子高通の後胤は現在子爵を賜はつてゐる。高廣の子高國は寛文八年事故に依り封を除かれ奥州南部に遷され、弟高勝に五千俵を賜つて家名を繼がせた。墓は高國の(註九)造立にかゝる。

### 松山久松家關係の墓碑

久松家は菅原道眞の後胤で永祿三年に松平性に改名し、明治維新に久松性に還元した。代々淨土宗であつたが京極高廣の女、即ち壽光院の娘が松山十五萬石松平(久松)三代定頼に嫁するに及んで家をあげて本宗の信者となつた、養仙院了榮妙護日立大姉がそれで、上の山丈六堂下に墓碑が在る、元和三

年のものと明治十六年のものと二基。明治建立の碑は側背にかけて墓碑誌が刻されてゐる。統記廿五卷に畧傳が見られる。身延山二天門（白毫樓）の創立者で、現在時刻を報ずる（註十）鐘の寄進主、鐘は三十一代日脱上人代の鑄造で脱師の銘が鑄られてゐる。尙ほ一丈六尺の寶塔をも造立寄進してゐる。養仙院の長子定長は家督を繼ぎ、二三男は今治及び桑名城主を繼ぎ、女は薩州綱久及び酒井若狹守忠圓に嫁してゐる。後胤は松山は伯爵、桑名及今治は子爵を授けられ現存してゐる。養仙院の塋域には定長夫妻其他の墓碑を存し、桑名十一萬石を繼いだ定重の養父定良の墓碑は筵師堂裏の青銅多寶塔型のものがそれである。酒井家へ嫁した女の墓は三光堂下の杉林中に見られる。

#### 前田家關係の墓碑

祖廟域に小型の五輪塔墓碑が三基見られる、その一つは加能越大守前田利家の室壽福院華嶽日榮夫人のそれで、統記廿五卷に畧傳が見られる。越前淺倉家臣イェトミの女、前田家二代利長及、大聖寺城主利常の生母寛永八年に卒し瀧谷妙成寺に葬つた。身延にある墓碑の内、前田家へ紹介した結果、壽明院日長とあるは壽福院の母の墓であることが判明したが、永鎮とある碑は不明である。壽福院の兄は日淳上人、姫は日條上人といひ、妙成寺、金澤經王寺の歴代である。身延山へは（註十二）五重塔を寄進してゐる、塔は高サ二十一間、奠師代の建立、後に寛文二年（註十二）前田五世綱紀（幼名綱利）の丹精で上之山へ移轉

され文政十二年に焼失。再建後明治八年焼失。壽福院は同時に池上、瀧谷へも五重塔を建立したが身延の塔が最も大きかった。瀧谷、池上のそれは保護建造物に指定されてゐる。前田家は現在候爵である。

### 牧野家關係の墓碑

上の山丈六堂下の墓域に信州小諸城一萬五千牧野康通の母、圓成院良心日悟大姉の墓碑がある。牧野氏は始め今川氏に事へ徳川氏と常に戦つてゐたが康成が徳川家康に下つて小諸城に封ぜられ、康通はその子息である。武内宿禰の後胤、現在子爵を授けられてゐる。

### 藤堂家關係の墓碑

丈六堂附近に藤堂家二世高次の墓碑がある。三智院殿圓明日融大居士、造塔の時、(註十三)祠堂金五百圓を寄進し、その内三百兩本院へ納め二百兩は當時疲弊してゐた支院へ分與してゐる。藤堂家は天武天皇の胤、近江國藤堂村に居て始めて藤堂を姓とし、高虎に到つて淺井長政に事へ次で家康に事へ關ヶ原役後、伊賀の上野城伊勢の津城に三十二萬石に封せられ現在は伯爵である。

### 太田家關係の墓碑

丈六堂上に太田資宗の墓を見る、瑞苑院道顯日應大居士。其他二基。丹波太田の住人源三位賴政四世

の胤國綱が始めて太田姓を名乗り後、關東に出て扇谷上杉氏に事へ、十代目に江戸築城によつて有名な道灌（資長）が出て、道灌から五代が資宗である。資宗の父重正は始めて徳川氏に事へ、資宗も家康秀忠に歷事し遠州濱松二萬石を領し、後掛川に移り現在子爵である。身延藏國寶胡直筆の幅物、後陽成院親翰等は資宗の寄進による。傳は別頭統記廿四卷に見える。

### 吉川家關係の墓碑

筵師堂附傍に周防岩國城主吉川廣嘉の室、その子廣純の室、その子廣達の室、その子經永の室の四代にわたる墓碑がある。吉川家は毛利家の臣、天下三大倍臣の一に數へられ、清定を祖とする。

廣嘉の室、天長院は羽林家鷺尾大納言隆量の女、天長山清泰院の開基。鷺尾家は現在伯爵である。廣純の室蓮徳院に石川氏、廣達の室は正理院、經永の室は□逕院、吉川家は現在子爵である。

### 三浦家關係の墓碑

祖廟域の壽應院妙相日覺大姉は三浦志摩守安次の母、總門建立の寄進主で、或書に三浦壹岐守明敬母とあるは誤りである。三浦家は鎮守府將軍平良文の胤、正次の長子は志摩守安次、次子但馬守共次、安次の子壹岐守明敬。三浦家は武藏七黨の三浦黨の旗頭で三浦郡二萬石を領し、共次は別に五千石を領してゐた。明敬の代に日向延岡に移り、更に三河荊谷城主に封せられ、現在は子爵である。壽應院は寛

文二年に卒し、墓は碑銘に依れば其次の（註十四）造立にかゝり、寛文二壬寅年に卒したのである。而して總門の建立は日眞上人の（註十五）棟札に依れば寛文五年であつた、故に壽應院の死後に建立されたものであつて、生前より工事にかゝつてゐたものか、或は弟共次が墓を造り兄安次が總門を立てゝ共に追福を祈つたかの二様に考へられるが、恐らくは前者であらう歟。

### 八條宮智忠親王の碑

上之山にある。親王に九條宮智仁親王の第一王子、御母は丹後侍従高知の女、一本には京國高國の女ともある。妃は加賀利常の女義子、侍女は重子と呼び本宗の信者であつた。（統記二十三卷）京極家も前田家も共に本宗に關係あることは前項に記すが如く、これ等の點から親王の墓が身延にあることも尤もと思はれる。墓は「中務郷智忠尊儀寛文二壬寅年寂」の字だけが判讀し得るのみ。親王の弟には勝行親王源忠世がある。尙ほ「八之宮」と稱する方とは全々別人である。

（註一）〔碑銘〕 征夷大將軍前左大臣從一位源朝臣家康公御息宰相權中將頼宣權少將頼房之母公源持氏六代裔蔭山長州利廣？

息女蓮華院日心寄財於諸僧令轉經王都一万部功就願成更起立石廟於祖跡延山命老衲日乾銘志趣手其傍云 妙鼎盛德佛龕說窮□□  
一字其德猶隆四生六道俱証空中 慶長十九年甲寅二（三歟）月日誌之

（註二）〔鐘銘〕 寛永元年龍集甲子八月如意球日 前住寂照院日乾謹誌



〔註三〕〔棟札〕 千佛造立大施主養珠院妙紹日心比丘尼 第二十六也日退

〔棟札〕 當堂願主日心併遠藤庄兵衛等奉加有之 日退

〔丈六堂古記〕 山主日退丈六堂建立を企つ奉安佛は京都禁中三位様と村雲様と又は養珠院なりと彫刻師は京都三寶寺中正

院日護上人

〔註四〕〔古記〕 寶藏（眞骨奉安處）第廿二世日遠代慶長年中紀伊大納言頼宣卿の母堂養珠院妙紹日心大姉立之

〔註五〕〔碑銘〕 報恩厚本者仁心之先務也故内外聖賢讀之行之其蹤可不尙哉吾源甲府君當祖母順正院殿妙喜日圓大姉一百箇日立一基石塔刻經王題名而茲納於身骨大聖賢之迹也天高顯者遮那之身形應化之妙像其功德盛干經論矣況刻以開權經王者豈尋常形像之謂乎於巨益於見聞觸知與大利於過視未來實不可量也願大姉酬此功薰如佛娘受記效龍女得果餘慶傳千万世勝馥徹十方界作銘曰 酬祖母恩造斯石塔刻經王名茲納身骨妙法功烈龍女即覺吁此勝緣益不可測培本浣根枝葉叢口餘慶廣傳万世維吉

〔註六〕〔碑銘〕 孝子從四位上近衛權少將源朝臣正之奉祀

〔註七〕〔墓背面〕 從四位上左近衛少將兼讀岐守源朝臣頼重奉立

〔註八〕〔涅槃圖讚〕 釋尊假現涅槃爲衆生示生死易曉朝露可惜分口拜此像渴仰心生預茲會無常念起制新樣者誰常山會韻氏爲兩闕者誰大明僧心越子莊嚴裝演爲先妣每歲二月望供養具奉祀 參議從三位兼行右近衛權中將源朝臣光圀拜贊並書 同口書 = 光圀公贊心越師滿涅槃像前傳燈日薩師周旋水戸久昌寺納之七十四嗣法日鑑代袈裝修理明治十一年三月十八日

〔註九〕〔墓側〕 丹後國主四位侍從源姓京極氏高國口而起立焉

〔註十〕〔鐘銘〕 京極氏落飾號養仙院其弟信收之又落飾號長松院二信女篤奉三寶無不以外護佛法爲任也近況山中不知時乃鑄大鐘而

寄焉又卜寶樓于方丈之南某處而虛鳴鐘行者無衣食資夫人又給焉於是乎延山十二辰之候備矣（中畧）時延寶八年歲次庚申中秋穀旦日脫誌

（註十一）〔日要上人棟札〕大日本國甲斐國巨摩郡波木井鄉身延山久遠寺五重塔棟札謹染之（中畧）信心願主加能越大守諫議大夫朝臣母公壽福院日榮抽於淨心建於靈廟（畧）

（註十二）〔古記錄〕廿四代日要代元和四戊午五月三日新初七月七日繩服同五年己未十月成就十一月十三四五塔供養有之高貳十一間。

寬文三癸卯年松平加賀守綱利金子六百五十兩爲施主今所移之（私——綱利ハ前田家五代綱利ノ幼名）

（註十三）〔三智院殿寺中祠堂金連判〕三智院殿圓明日融大居士爲身延山永代日杯料黃金五百兩寄脩之全收本院當時寺中困窮故以其內貳百兩賜與之因茲正月忌日持房滿山逢祖師堂集會播看妙典一部兼於各坊中每月廻向無退轉動之以備尊靈御菩提而已延寶五丁巳年三月三日當山三十世日通（塔中七拾坊連署）

（註十四）〔碑銘〕寬文二壬寅年□月四□施主三浦但馬守共次

（註十五）〔棟札〕三浦志摩守母儀壽應院妙相日覺寬文五年九月